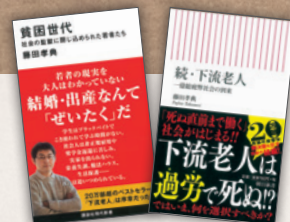


自己責任論で 若者の未来を奪うな!



『貧困世代』
(講談社現代新書／2016年3月)
『続・下流老人』
(朝日新書／2016年12月)

「一億総中流」と言われていた日本で、「貧困」がじわりと広がっている。それは、子どもや若者から、将来の夢さえ奪いとっている。希望が持てる日本にするために、私たちは何をすべきか。著書の『下流老人』や『貧困世代』で生活相談の現場から見える日本の貧困問題を問い、「このままでは『一億総貧困社会』になる」と警鐘を鳴らす、NPO法人ほっとプラスの藤田孝典代表理事と、神津会長が語り合った。

見えない？

現代の貧困

夢を語らない、語れない

平川 『下流老人』『貧困世代』と、「現代の貧困」に焦点を当てた藤田さんの著書が大きな反響を呼んでいます。日本の貧困の現状をどうみえていますか。

藤田 私は、さいたま市で「ほっとプラス」というNPOを運営しています。年間相談件数は約500件。10代の若者から、シングルマザー、お年寄りまで、年齢や性別を問わず、毎日のように相談が寄せられます。家賃を滞納して住居を失った、ブラック企業で酷使され心身を壊してしまった、家族との関係が悪く行き場がない……。困窮の原因は複雑にからみ合っていて、本人の努力だけでは生活再建は困難です。だから生活保護の申請に付き添ったり、低家賃の住宅やシェアハウスを一緒に探したりもしているんですが、最近、さまざまな要因で低所得になる人が増えていると実感します。

そして問題は、その貧困の実態が見えにくいこと。日本に貧困問

題があるとは思っていない人はまだまだ多いし、当事者も自覚が乏しい。解決の第一歩として、日々接している人たちの問題を「見える化」したいという思いで、本を書きました。

神津 『下流老人』『貧困世代』は言葉としてもインパクトがありましたね。相談事例もたくさん掲載されていて、こんなふうには解決できたのかとほっとさせられましたが、「ほっとプラス」という名前の由来は？

藤田 市民がほっとできる社会的居場所をつくりたい、孤立して困窮している人たちと出会える場所でありたいと願って名付けました。本を出して相談がものすごく増えましたが、「現代の貧困」を認知してもらおうでも効果があったと思います。

神津 誰にも相談できず、一人で抱え込んでしまう人が多い中で、相談できる場があることを知ってもらうのは大事ですね。

藤田 そうなんです。相談に来た人たちは氷山の一角。おそらく労働組合も同じ課題を抱えていると思うんですが、私たちも、出会っていない人たちに対しての発信がまだまだ弱い。若い人は、ネット

ニュースやSNSが情報源、高齢世代は新聞や雑誌、テレビが有効です。だから、あらゆる媒体を通じて、存在をアピールし、できるだけ出会える場所を増やしていかなければと思っています。

神津 日本は「一億総中流」と言われた時代があつて、その成功体験の前提から抜けきれないことが、問題を深刻化させている面もありますよね。

藤田 はい。政策決定に関わる方たちに、いまだにその幻想を抱えている世代が多すぎて困ります。一億総中流の背景には高度経済成長があつて、生活保障は企業の福利厚生や家族に委ねることができた。でも、いまや企業も家族もその役割を果たせなくなっています。若者やシングルマザーなど、既存の福祉制度ではカバーされない人たちも、安心して暮らしていけるシステムを構築する必要があります。

神津 貧困対策には、生活保護などの救済政策と、貧困の連鎖を防ぐ奨学金制度などの防貧政策があります。日本はどちらも弱いんですね。生活保障は、不正受給ばかりが目されますが、本来受給できる人をすべてカバーしているわ

けではない。子どもたちへの影響が心配です。

藤田 そうなんです。今、子ども食堂や学習支援の現場にも関わっているんですが、子どもたちが夢を語らない、語れない。将来の希望を持たないことが自分を守る道だと思っているんです。そんな子どもたちから、「早く働いてお母さんを楽にさせてあげたい」という言葉が出てくる。いつの時代なんだろうと涙が出てきます。実際に高校生になると、バイトをして家計を助けている。日本の貧困は、戦前の「おしん」の時代と変わらな

いほど深刻になっているんです。

若者の貧困へのアプローチ

貧困世代の当事者として

平川 藤田さんが相談・支援活動に携わるようになったきっかけは？

藤田 私は、1982年生まれの就職氷河期世代です。学校を卒業したら、普通に働けると思っていたら、まったくそんな状況ではなくなりました。学生時代には「ニート」や「フリーター」という言葉が流行



藤田孝典 ふじた・たかのり

NPO法人ほっとプラス 代表理事・社会福祉士

NPO法人ほっとプラスを設立し、ソーシャルワーカーとして生活困窮者やホームレスの相談、支援にあたる。聖学院大学人間福祉学部客員准教授。反貧困ネットワーク埼玉代表。ブラック企業対策プロジェクト共同代表。著書に『続・下流老人』（朝日新書）、『下流老人』（朝日新書）、『貧困世代』（講談社現代新書）、『ひとりも殺させない―それでも生活保護を否定しますか』（堀之内出版）など。

■特定非営利活動法人 ほっとプラス

2011年設立。埼玉県さいたま市を拠点に、社会福祉士の資格をもつ相談員が生活や福祉に関する総合的な相談を受付、福祉サービス利用などの支援活動を行っている。相談は無料。平日毎日、電話、メール、来所で相談を受け付けている。

労働組合は労働者にとって一番身近な存在 その姿、物語を、もっと「見える化」してほしい

がやっていった福利厚生を社会化していく必要がある。経団連自身も、企業だけで福利厚生をカバーするのは難しいからと、政府の役割を求めています。

生きていく上では、誰もが失業や病気、事故、介護などのリスクを抱えています。現在の日本では、個人や家族の自助努力にゆだねられ、安心はお金で買うしかなくなっている。だから、貧困がここまで拡大しているんです。教育、住宅、医療・介護、保育、そういう最低限必要なサービスは、無料か低負担で利用できるようにしていく。私はこれを「脱商品化」と呼んでいます。必要なサービスを商品として買わなくてもいいようにしていくことが必要です。そのためには社会保障を充実させるために税金を上げようという合意形成をしていく必要があります。労働

組合には、後々こが転換のきっかけになったと言われるような政策提言をしてほしいと思います。

神津 連合は、「働くことを軸とする安心社会」のビジョンを提起し、その基盤となる「社会保障と税の一体改革」の推進を求めています。おっしゃるように、困っている人だけを助けるのではなくて、みんなで負担してみんなで必要なサービスを受けられる社会にしていこうと呼びかけています。

平川 連合に期待することは？

藤田 労働組合って労働者にとっ

て一番身近な存在であってほしいと思うているんです。でも、若者の多くは、助けを求める選択肢としてイメージできない。労働組合がどんな存在で、どんな役割を果たしているのか、どんな活動をしているのかを知れば、もっと身近に感じることができる。だから、

労働組合の姿を「見える化」してほしい。労働組合にどんな労働相談がきてどう具体的に解決したのか、その物語を発信してほしい。

神津 連合も、労働相談ダイヤルを開設していて、フリーダイヤル「0120-1154-052」にかけると、最寄りの地方連合会につながる仕組みになっているんですが、最近労働相談の枠にとどまらない支援が必要なケースが増えてきていると感じています。そこで地方連合会と労福協、ろうきん、全労済などが連携して、労働相談、生活相談、就労相談などができるワンストップサービスに取り組んできたんです。

藤田 実は、連合埼玉とは十数年

来のお付き合いなんです。リーマンショックの時に、連合埼玉にも派遣切りの相談が急増して、住まいの確保や生活保護申請、借金の整理、就労支援などでお互いに連携できないかという話が当時の鈴木事務局長からあり、連携して相談活動にあたってきました。連合が呼びかけるとたくさんの団体が集まってくれる。まさに「連合が動けば社会が動く」と実感しました。最近、フードバンク事業に



「連行／平川則男 連合総合政策局長」

語になり、先輩たちがどれだけ頑張っても非正規の就職しかないという状況を目の当たりにし、自分もその当事者なのだと自覚しました。学生時代にホームレスの支援活動を始めたんですが、話を聞いていると、これは自分の将来かもしれないと思いました。だから、自分も含めて若者が将来ホームレスにならないためにはどうすればいいのか、真剣に考えました。そして、社会福祉を学んで社会福祉士の資格を取り、相談・支援活動を始めたんです。私自身、貧困世代の当事者として問題に取り組んでいるんです。

当時、若者の貧困は自己責任だと言われたんですが、後から調べてみると、そうじゃない。1995年に日経連が「新時代の『日本的経営』というビジョンを出し、非正規雇用が意図的に拡大されることになったと。

組合には、後々こが転換のきっかけになったと言われるような政策提言をしてほしいと思います。

神津 連合は、「働くことを軸とする安心社会」のビジョンを提起し、その基盤となる「社会保障と税の一体改革」の推進を求めています。おっしゃるように、困っている人だけを助けるのではなくて、みんなで負担してみんなで必要なサービスを受けられる社会にしていこうと呼びかけています。

平川 連合に期待することは？

藤田 労働組合って労働者にとっ

て一番身近な存在であってほしいと思うているんです。でも、若者の多くは、助けを求める選択肢としてイメージできない。労働組合がどんな存在で、どんな役割を果たしているのか、どんな活動をしているのかを知れば、もっと身近に感じることができる。だから、

労働組合の姿を「見える化」してほしい。労働組合にどんな労働相談がきてどう具体的に解決したのか、その物語を発信してほしい。

神津 連合も、労働相談ダイヤルを開設していて、フリーダイヤル「0120-1154-052」にかけると、最寄りの地方連合会につながる仕組みになっているんですが、最近労働相談の枠にとどまらない支援が必要なケースが増えてきていると感じています。そこで地方連合会と労福協、ろうきん、全労済などが連携して、労働相談、生活相談、就労相談などができるワンストップサービスに取り組んできたんです。

藤田 実は、連合埼玉とは十数年

来のお付き合いなんです。リーマンショックの時に、連合埼玉にも派遣切りの相談が急増して、住まいの確保や生活保護申請、借金の整理、就労支援などでお互いに連携できないかという話が当時の鈴木事務局長からあり、連携して相談活動にあたってきました。連合が呼びかけるとたくさんの団体が集まってくれる。まさに「連合が動けば社会が動く」と実感しました。最近、フードバンク事業に



神津里季生 こうづ・りきお

連合会長

組合員が気軽に相談できる環境があるのか 労働組合も謙虚に足元を見つめる必要がある

普通にと考えると、働く現場で何かが起きているとしか言いようがない。長時間過重労働やパワハラで若者が使い潰されている。大手広告代理店の新入女性社員の過労自殺も、その氷山の一角だと思います。

ほっとプラスには、すでに休職したり退職して追いつめられた段階で相談がくるんですが、労災申請も雇用保険の手続きもできていない。だから、もう少し手前の段階で、まだ職場にいる段階で支援ができれば、ここまで困窮せずに済むの

普通にと考えると、働く現場で何かが起きているとしか言いようがない。長時間過重労働やパワハラで若者が使い潰されている。大手広告代理店の新入女性社員の過労自殺も、その氷山の一角だと思います。

ほっとプラスには、すでに休職したり退職して追いつめられた段階で相談がくるんですが、労災申請も雇用保険の手続きもできていない。だから、もう少し手前の段階で、まだ職場にいる段階で支援ができれば、ここまで困窮せずに済むの

普通にと考えると、働く現場で何かが起きているとしか言いようがない。長時間過重労働やパワハラで若者が使い潰されている。大手広告代理店の新入女性社員の過労自殺も、その氷山の一角だと思います。

ほっとプラスには、すでに休職したり退職して追いつめられた段階で相談がくるんですが、労災申請も雇用保険の手続きもできていない。だから、もう少し手前の段階で、まだ職場にいる段階で支援ができれば、ここまで困窮せずに済むの

普通にと考えると、働く現場で何かが起きているとしか言いようがない。長時間過重労働やパワハラで若者が使い潰されている。大手広告代理店の新入女性社員の過労自殺も、その氷山の一角だと思います。

ほっとプラスには、すでに休職したり退職して追いつめられた段階で相談がくるんですが、労災申請も雇用保険の手続きもできていない。だから、もう少し手前の段階で、まだ職場にいる段階で支援ができれば、ここまで困窮せずに済むの

普通にと考えると、働く現場で何かが起きているとしか言いようがない。長時間過重労働やパワハラで若者が使い潰されている。大手広告代理店の新入女性社員の過労自殺も、その氷山の一角だと思います。

ほっとプラスには、すでに休職したり退職して追いつめられた段階で相談がくるんですが、労災申請も雇用保険の手続きもできていない。だから、もう少し手前の段階で、まだ職場にいる段階で支援ができれば、ここまで困窮せずに済むの

貧困の連鎖をたち切るために ―労働組合の役割

連合が動けば社会が動く

平川 貧困の連鎖をたち切るには？

藤田 人々の生活を支える上で、賃金と社会保障は両輪だと思っています。春季生活闘争で賃上げを獲得し、最低賃金を引き上げると同時に、これまで企業や家族